

「驚き」の現象学

山 根 一 郎*

Phenomenology of Surprise

Ichiro YAMANE

1. 問 題

本稿は心理的距離の具体的諸相としての感情現象の研究の第一歩として、驚き感情に注目したものである。

また、感情に注目するのには別のより根源的な理由もある。心的機能における対象の一次評価は「感性」によってなされるが、その感性と連合して後続する二次評価は「知性（理性）」と「感情」によって並列的になされる。すなわち知性と感情は互いに独立して機能しうる（知性的評価と感情的評価の並立例は、山根 2004）。知性が動物的生から超越した普遍的視点からの「それはそれ自体として何であるか」という認識をその究極の在り方とするなら、感情はあくまで自己の生に内在・立脚した、「それは生きている自己にとってどのような意味をもつか」という視点での評価機能である。ならば、生きている人間存在の意味を探りたいなら、センサー機能である感性や記号演算処理のような機械的知性ではなく、豊かな感情に求めてこそ解明できるのではないか。

感情は種類の異なる個別感情に分類できる。従来の感情論は感情の一般機能を軸に個別感情を分類するというトップダウン的アプローチが主流であったが、それでは個々の感情は相対的な比較で終わってしまい、個々の感情に対する深い理解が得られない。感情を個別に丁寧に考察していくことも大切である。

1.1 なぜ「驚き」か

そこで「驚き」である。デカルトは『情念論』において、基本6情念（passion）のなかで「驚き」を最初に挙げた（その他は愛、憎み、欲望、喜び、悲しみ）。彼の言う基本情念というのは、他の情念の構成要素になるという意味で、色彩での原色に相当する。なぜ驚きが最初かというと、驚きが事物に接した場合の最初の情念となりうるためであるという。すなわち、事物に接した時、驚くか否かが最初の感情体験となる。ちなみに驚きの感情は、個体発達のにも発現が早く、生後数時間の新生児に現れるという（イザードのレ

* 文化情報学部 文化情報学科

ビューより、1991)。驚きはデカルトによれば、「印象の不意打ち」によるものであり、反対の情念を持たないという。また驚愕は過度の驚きであって、悪いものであるという。さらに驚きの下位感情として、尊重（対象の大きさに驚く）と軽視（対象の小ささに驚く）を挙げている。すなわち、驚きの原因の本質、感情構造上での特異な位置、驚愕反応の不快性など、デカルトにおいてすでに驚き感情の基本特徴が出そろわれた。デカルトに依らずとも、驚きを個別感情の最初に扱うことは、その原因の単純性、生理的反応と強く結びついた情動という（情感や情緒などくらべた）原始性、反応の単純さ、また他の感情との関係性や分化度の弱さなど、他の感情とくらべて構造的なシンプルさが予想される点でふさわしいといえる。本稿でも、驚きの本質を生理・行動的な「驚愕反応」を伴って体験する原始的な情動（興奮）としてとらえる。

1.2 なぜ「現象学」か

次に本稿はなぜあえて「現象学」というアプローチをとるのか。感情を研究する既存の科学的アプローチには、生理学、心理学、行動生物学などがある。また精神分析論も感情の発達・分化に対する理論を提供している。ただし、これらのアプローチは、感情を物理的事物と同じく外在的な対象、すなわち存在者（すでに存在しているモノ）として扱い、その観察可能な徴候（記号）を感情の指標とみなして（あるいは感情そのものと同一視して）いる。これらの客観主義的科学が素通りしているのは、感情をすでに客観的に外在するモノとして捉える以前の、その根拠となる、感情はいかに体験として与えられたかという点である。

現象学では、事物が客観的に存在していることを最初から信憑している素朴日常的な態度を「自然的態度」といい、この自然的態度よりいくぶん学的であるが、依然存在者が客観的に実在することを前提とする地点から出発するいわゆる科学的態度を「自然主義的態度」という。それに対する現象学的態度では、これらが素通りしてきた自己についての事実としての（主観的側面と客観的側面とに別けられる以前の）体験から出発する。体験した対象が客観的に実在するかどうかは体験の検討を経て初めて可能になる。であるから、現象学では、たとえば他者を客観的に実在するモノとして在ること（対人認知）から出発するのではなく、他者がいかに与えられているかという体験（他者経験）の解明から始める。現象の解明とは、自己の内省を素朴に記述したり、知覚された対象を素朴に計測すること、すなわち現象に対する素朴な信憑（主観主義・客観主義）から離れて、存在者の「現れ」（現象すること）の根拠・過程を問うことである。本稿から始まる感情研究も心理学で研究されてきた諸感情について、現象学的に捉えなおそうという試みである。

1.3 驚きの捉えがたさ

驚きは、生理・行動的反応が顕著なため、感情体験としてよりも生理・行動的次元の解明で終わってしまうおそれがある。驚き体験の特徴は、客観的捉えやすさに対比される、その体験的（現象学的）な捉えがたさの中にあるといってもよい。驚きが外界の刺激に対する通常でない特異な反応であるなら、ある状況で「なぜ驚くのか」という問いは、その他の（いつもの）状況で「なぜ驚いていないのか」という問いに置き換えることができる。驚きの謎の答えは、実は驚いていない日常性の中にあるともいえる。その日常性は後

述するとして、まず驚き体験が当事者にとってもとらえにくい（外的にとらえやすい）特徴を「瞬間性」と「全体性」としてまとめてみる。

a. 驚きの瞬間性

驚きは一瞬にして終わる。われわれは「驚いた」とは言えるが「今、驚いている最中だ」とは（レトリックでない正確な内省報告としては）言えない。また怒りや悲しみと異なり、過去の感情体験の想起によって驚き感情は再生しない。すなわち毎回の驚きは瞬時にして1回性の現象である。驚きのこの持続不能で再生不能という点が、他の感情とは著しく異なっており、生き生きした記述を困難にする。すなわち、愛や悲しみとは異なり、驚きつつ、それを味わいながらそこから意味に満ちた内実を引き出すことができない。驚きの現象学的探究を困難にするこの瞬間性は、しかし同時に驚きの「時間性」という他の感情にはない特徴を明示している。驚きの瞬間の体験を生々しく描写することは無理にしても、この時間性という抽象的特徴の記述から驚きを解明していくことはできそうである。

b. 驚きの全体性

我々は悲しんでいながらも、その悲しみや悲しんでいる自分に対して距離をおいて（知性の目で）眺めることができる。しかし驚きながらそれはできない。驚いているその時、驚いている以外の状態を併存できない。それはほんの一瞬ではあるが、全身で・全精神で驚いている。驚きにおいて知性は無力である。そして行動的な驚愕反応を抑えることもできないし（ごまかすことで精いっぱい）、驚き感情を潜在（深層）化することもできない。これはもちろん他の感情でも、それが強い場合には該当する。しかしそれらの感情のうち真に全体性をもたらす強さになるのは生涯のうちでは数えるほどしかあるまい。ところが驚きの場合は、ちょっとした物音に対しても心の全体で驚いてしまう。すなわち驚きに対しては距離をおくことは難しい。これは驚きの心理空間的特徴といえる。驚きは、時間的に捉えがたく、心理空間的に捉える事も困難をきわめる。

驚きはこのようにあまりに儚く同時に我を忘れる強烈な体験であるが、このような捉えがたさそのものを逆手にとって、驚きの謎に接近する手がかりにしていきたい。

2. 驚きの心理学的整理

現象学的探求の準備として、驚きについての心理学的知見、すなわち心理学的に捉えた驚き現象をまとめてみる。といっても先行研究の網羅的な概観はせず、後続する現象学的探求にとって参考になりうるものに絞る。

2.1 驚きの行動・生理反応

まず客観的観察によって得られる驚きは、驚愕反応という身体的反応である。身体的驚愕反応は感情としての驚きと同時に発生し、互いの強さも相関する。すなわち、一定以上の強い驚きが驚愕反応として観察される。

エクマンら（1975）は綿密な表情分析によって、驚きの表情は、上瞼の緊張による対象への注視と下瞼以下の弛緩による脱力発作という相反する方向をもった2種の反応の合成

であることを示した（図1）。対象への注視は、驚かせる対象への情報探索行動であり、危険かどうかの判断をさせるものである（驚かせないものは危険でない）。一方動物が示す脱力発作は外敵に遭遇した時の擬死反射が起源であろう。すなわち驚きの表情は（注視している）対象からの近すぎて逃走できない状況での最終的な防御反応を含んでいる。

このように驚きはまず身の危険への対処を意味している。実際、表情以外の驚愕反応として、頭部を後方にのぞけさせる（頭部の保護）、下腿で飛び跳ねる、手を引くなど、反射的な筋緊張による各部位の防御（回避）と解釈できる反応がみられる。

また驚きの強度が増すと、脱力発作が首から下へ進む。これは強い恐怖反応と共通するのだが、すわり込み（足腰が立たない）、失禁へと至り、あるいは失神、さらに本物の死にいたる場合すらある。

驚きは生理的には交感神経を興奮させ、それに伴って急激な拍動の増加・血圧の上昇がおこる。したがって強い驚きは、生理的ストレスを高め、生命の危機にまで達する。驚愕による死は、このストレスによる心因性のショック反応や心臓血管系の急激な過負荷による障害のためと思われる。驚きはその強さに応じてこのような生理的興奮を伴うが、他の興奮感情（情動）と異なり、驚きだけでは涙は出ない。驚きは自らの感情の強さに浸ることができず、強い拍動という驚きの余韻を味わうしかない。

エクマンらが明らかにした驚き表情における混合性は、驚き体験の理解（現象学的構造化）を深める貴重な知見である。表情というもっとも表層の反応が、驚きの深層の理解のヒントになりそうである。

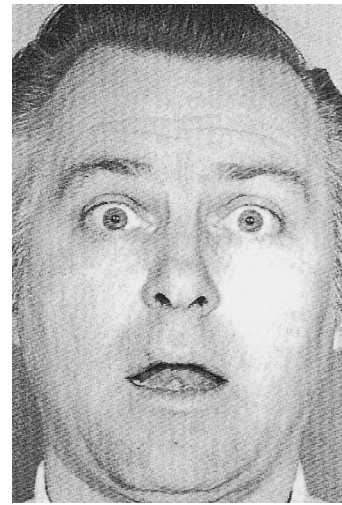


図1 驚きの表情
（エクマン&フリーセン1975より）

2.2 感情構造からみた驚き

次に感情としての驚きの特徴を探ってみる。すなわち感情の原因となる対象、強度の幅、類似感情、対立感情、後続感情などについて筆者の視点で論じてみる。

a. 驚かせるもの

驚きを刺激に対する反応とみた場合、驚きの原因はその刺激（驚かせるもの）の特性にかかわっている。まず驚きは、怒りや悲しみなどのような「意味」に対する反応とはいひにくい。驚きは事態を解釈する以前にもう生じているからである。むしろ刺激自体の現れかた・その強さに関係する。エクマンらは驚き表情の分析では価値ある知見を示したが、驚きの原因を「予期せぬ出来事と予想と反した時の出来事」としたのは（後述する「意外感」と「驚き」とを混同する）通俗的発想のままである。後述の例が示すように、予想と反しても驚かない場合もあり、また予想していながらも驚いてしまう時もある。そもそも天気予報がはずれた翌朝に我々はいちいち驚くだろうか。

一方、イザード（1991）は驚きを「刺激の急激な増加によって活性化される情動」と

し、予想との不一致を発生条件とはしていない。またイザードが紹介しているチャールスワースの説明、「驚きは予期しないというよりは、誤って予期された出来事」というのは予期のデフォルト状態との相違という意味では後段は前段の否定ではなく言い換えに過ぎない。予想と予期を心理学者は区別しているのか否かは不明であるが、この未来への意識とそれに対する不意打ち性とが驚きと密接にかかわるらしい。

b. 強度

すべての感情には強度の幅があり、驚きも例外でない。そこで、広義の驚きといえるものを、その強弱で二分してみる。ちなみに、本稿で扱う「驚き」はあくまで心理学的概念であって、国語辞典的用法とは関係ない。

強：ピクッ・ピクッとなる場合。生理・身体的な驚愕反応 (startle reaction) を伴う。あえて強い驚きをさす場合は本稿では「驚愕」と表現する。驚愕の場合は、デカルトが述べたように、刺激自体が快-不快の次元で中性的であっても不快感情が後続する。少なくとも驚かせる刺激が繰り返されるのを好まない。驚かせたものが意味的に「不快」なのではなく、驚くこと自体が不快 (ストレス) となるからである。

弱：ハッとなる場合。声を発するなら「アッ」となろう。軽い部分的な驚愕反応を示すレベルから、ほとんど自覚しないあるいは驚愕反応が外部的に観察できない場合も含める (おそらく GSR では反応がみられるであろう)。たとえば、玄関や電話の呼び鈴が鳴った時、自分や近くの者が物を落とした時など、日常生活の中でよく体験する。本稿で驚きという場合、このレベルも含める。

c. 純粋な驚きでないもの (類似感情)

デカルトでも尊敬や軽視など評価が混じった感情を驚きのバリエーションに挙げたように、驚き以外の感情が混ざった反応がある。これらは国語的には「驚いた」と表現されうるが心理学的な感情単位としての驚きとはいえない。

意外感：たとえば「エッ？」という疑問音を発する時の体験。刺激そのものに対する反応ではなく、すでに解釈された意味に対する反応で、この意外感こそが実は「予想に反した時」の典型的な反応である。顕著な生理・行動的な驚愕反応を伴わないが、表情など行動的反応は驚きと同じである (そのため表面的な視点の心理学者は驚きと同一視しやすい)。実際に驚きを伴うこともあるが、驚きに後続する別の感情にすぐに支配される。それゆえ驚き終わっても意外感は持続する。さらに意外感が強いと「信じられない」「ウソ！」と表明するように、受容の躊躇があるため、意外感の持続は延長する。この場合不快であってもそれは情報内容に対する不快であって、驚愕反応の生理的ストレスによる不快感とは異なる。

感心：「へー」という感嘆音を発する場合の体験。これも意味的意外感の一種で、既知の情報の枠に反する情報を得た時の反応である。言語的には「驚いた」と表現される場合もある。しかし感心には「感動」という別感情の要素の方が多いため快をもたらす。すなわち国語表現としての「驚異」や「驚嘆」も強い感心であって心理学的な驚きとはみなせない。この場合の快は、予想外の情報の獲得によって知識構造が更新されたことによる達成感的な快感であり、知識の実用的価値は必要ない。まさにテレビ番組「トリビアの泉」

(フジテレビ系列)で出演者・視聴者が示す反応であり、またそれが視聴者にとっても快であるから番組の人気がある。このように、快となるのは価値のある(デカルト的にいえば)尊敬の感心であるが、軽蔑の感心となるのは「あきれる」場合である。

驚くことそのものと、それに後続する感情とを混同してはならない。たとえばアメリカ人は surprise party が好きらしく、それを驚くことが快である例としてあげられる(エクマンなど)。しかしこれが喜ばれるのは、驚かせた目的が本人を祝うパーティであることが判明したからであり、「surprise!」と一斉に叫ばれて驚くことそのものによるのではないことは明白である(驚かせるだけで喜ぶるなら、パーティをやる必要はない)。

d. 対立構造

ある個別の感情を理解するには、感情全体の意味構造上での相対的位置を探ること(古典的には、個々の感情を快-不快軸と興奮-沈静軸の二次元空間にプロットすること)も確かに有効である。ここでは意味論的対立構造を考え、驚きはデカルトが述べたように対立感情をもたないかどうかを検討してみる。ちなみに対立感情を筆者は以下のように反対感情・矛盾感情・無化感情に3分類する(ただしこれらは必ずしも截然と分けられるのではない)。

反対感情：反対意味の感情。好きに対する嫌い、愛に対する憎しみのように、反対感情は心理学的には特に接近-回避軸に対応する場合が多い。反対感情の特徴は、感情意味としては反対であっても心理的には両立可能な点である。このような現象は珍しくなく、心理学では両価的(ambivalent)状態として知られている。本人が両価的状态に自覚的に悩んでいれば「葛藤(dilemma)」となり、無意識であれば精神分析用語で「complex(感情複合)」といわれる。

驚きに対する意味的に反対の感情は、驚きが予想に反した反応であれば、予想・期待どおりの「当然感」が該当するかもしれないが、ただし上で論じた視点では、これは意外・感心レベルの反対感情となろう。そもそも驚きには他の感情が並立する余地がないとすれば、両立可能という意味での反対感情は存在しえない。

矛盾感情：これは意味論的關係によらず、心理的に両立できない感情である。たとえば愛に対する無関心が相当する。心理学的には反対感情よりも対立度が強く、意味論レベルより一段高次の対立関係ともいえる。本来驚くべき場面で驚かない場合、この感情が支配的になっているといえる。驚きの矛盾感情は、期待よりもさらに強い驚きの反対方向にある状態。これは興奮としての驚きに対しては沈静状態に属するはずであるが、驚く前の平静(驚きを可能にする平静)とは異なる感情とすれば、そのような特定の感情は思い当たらない。むしろ感情というよりは、強い意識集中や意識水準の低下などが驚きを不能にするといえる。

無化感情：怒りに対する赦し、恋慕に対する幻滅のように、当該の感情を無化する、意味的というより機能(働き)的に対立する感情である。すなわち驚きをうち消す感情ということである。これは驚きはいかにして終わるのかという問題とかかわる。驚きはそれに替わる感情によって消滅するのであろうか。その感情が発動しなければわれわれはいつまでも驚き続けるのだろうか。驚きはすぐに自己消滅するのが特徴であった。無化機能は驚き自体に内在しており、他の感情があえて驚きを抑える必要もなく、不可能でさえある。逆

に言えば、驚きは他の感情のように自己強化する（たとえば笑いがおかしさを、怒りが怒りを、泣くことが悲しさをさらに強める）ことがない。すなわち驚きを無化するのとは別の感情ではなく、単に時間である。

以上、デカルトが指摘したように、驚きの対立感情は明確には見いだせなかった。

e. 他の感情との関係

驚きと他の感情との関係性を時間変化からみると、驚きはすぐ消失し、また逆に他の感情から転移することがない。驚いた後に他の感情が後続することはあるが、それは驚きから変化したものではない。驚きの後に恐怖が後続し、パニック状態となる場合もあるが、逆に誤認によって驚いた場合はすぐ平静に戻る。すなわち驚きに後続する感情は必ずしも驚きと連関があるわけではない。つまり驚きはひじょうに自立性の強い孤立した感情である。

2.3 ま と め

驚きが注視と脱力という筋肉・神経的に相矛盾する反応の混合であることは驚き体験の複雑性を示唆している。また意外感や感心以外の感情とは共通性が少なく、意味構造的に孤立した感情といえる。ただし、本質的にはデカルトの知見以上に新たに加えるべきものはなかった。これは、驚きを外部観察的に、すなわち測定可能な実体としてとらえることの限界による。なぜなら、驚きに随伴する現象や驚きを引き起こす原因、あるいは驚きの相対的位置づけなどの探求は、「驚くとはどういう体験か」という問いには答えるものではなく、驚き体験(驚いていること)そのものの周囲を徘徊しているにすぎないからである。

3. 驚きの現象学的構造

「驚くとはどういう体験か」という問いは、驚きの瞬間、驚いている本人はどのような体験をしているのか、を問うことである。しかしそれは、驚いている時の内省（表層意識）を記述することではない（もとよりそれは驚きの瞬間性と全体性により不可能である）。驚きを可能にしている次元、すなわち驚きの体験形式（現象の深層面）を問うことである（この次元の探求は、時系列的因果論に対する構造的因果論といえる）。驚き体験とは、驚かす（不意打ちする）モノのことではなく、驚いている（不意打たれている）コトである（心理学ではこれらが渾然としている）。そこでその瞬間的な驚きの時間性を問題にする。

3.1 時間性

これまでの知見によれば、驚きは、予期（予想ではない）に反した不意打ち、すなわち突発的な刺激の増加に対する、瞬間的な反応である。驚きの第一の特徴は、驚かせるものの「突発」あるいは驚いていることの「瞬間」というような時間性にある。

ここで問題にする時間は、心理学で扱われているような対象化＝存在者化された時間（時間感覚）、すなわち時計で表示される客観的時間でもなく、それにいくぶんズレて対応する主観的時間感覚でもない。体験する場（開け）としての対象化＝存在者化している時

時間である。実は体験する場としての時間があるから、時間を知覚対象化（時計化）できるのである。すなわち、本来の時間とは、長いか短いかの間隔（モノ的時間）の問題ではなく、流れるコトそれ自体である。私が在ること＝私の生が流れること、これが原初的な「時間」の意味である。であるから、客観化された物理的時間はもとより、心理学的に存在者化された内省的時間感覚さえも二次的派生物であり、時間性の本体ではない。したがって驚きの突発性・瞬間性は、それが何ミリ秒の出来事かという客観的な意味での時間ではなく、体験場としての時間性の現象である。

驚きは「現在」という時間体験と強くかかわっている。しかもそれは一瞬の異常体験である。結論を先に述べれば、現象学的現在構造の破壊という衝撃である。しかしその前に、その破壊されるという通常の驚いていない場合の時間体験構造を論じる必要がある。

a. 現象学的現在の3契機

時間体験の現象学理論から、驚きを可能にしている時間構造を探ってみる。フッサール（1928）は「現在」という体験場、すなわち「今」として体験されている時間が微分された瞬間ではなく、一定の時間幅をもっていることを、メロディ（相異なる音程の連結によるゲシュタルト）知覚を例にして論じた。それによれば、現在は予持・原印象・把持の連鎖からなる。そして未来は予持の先にあり、過去は把持の向こうにある。未来も過去も今として現前しておらず、それらは敢えて想起（予想、回想）によって準現前化されるのに対し、予持も把持も今として現前している。

原印象（Urimpression）は、今の中心・源泉である。意識が生じて最初に体験した瞬間は原印象から始まる。しかし原印象をしっかりと受けとめようとするそれは過ぎ去ってしまう。その過ぎ去りつつある「たった今」が把持（Retention）である。把持は原印象で触発された印象を構成する場である。心理学で言えば、短期記憶として保持されている現在ともいえる。把持は原印象の把持であり、長期記憶として想起された過去（過ぎ去ったものとして再想起されるもの）を把持するのではない。それゆえ斎藤（2000）の言うように「過去把持」という訳語は誤解を与える。

すなわち原印象と把持を合わせた部分が印象形成過程であり、その間の移行過程そのものが「流れること」である。そして次々と続く原印象から把持への移行はベルトコンベアのような一連の移動として、個別の原印象-把持連鎖を越えた「流れ」（客観化されうる時間感覚）が構成される。この止まることなく繰り返される原印象-把持連鎖の連続を「把持系列」と言っておく。

予持（Protention）は、「今まさに」という眼前に迫っている場である。ヘルト（1966）によれば、「原印象と準現在化との間の中間形態を形成している志向性」であり、「先準現在化（予測・予期）を可能にする」ものである。また彼は「まだ遠くに保持されているものを、遠いままに、非主観的に先取りすること」というが、予持は未来ではなく次の原印象を予持するのであるから、決して遠くにはないはずである（「未来予持」という訳語も不適切）。

b. 「流れること」と予持

なぜ予持が可能となるのか。時の「流れ」（過ぎ去り）を得るだけなら把持系列を体験

すれば充分である。しかし世界の中で能動的に生きる動物にとっては、変化し続けている事態の中に身を投じなければならない。逃げる捕食対象の動物を追う時、逃げている「たった今」の動きから一瞬先を見越した追い方をしなくてはならない。そこに必要なのは把持の未来への折り返しとしての予持能力である。すなわち予持は、その先の未来からの現実化（予想の実現）ではなく、原印象と把持の連鎖（把持系列の具体相）の未来方向への延長（外挿）である。この把持から外挿された予持が原印象化する過程を「予持系列」と言うなら、現在内の流れは原印象を中央に予持系列という流れと把持系列という流れの合接となる。

体験する場としての時間とは、この二系列によって構成される「流れること」（作動）のことである。すなわち自我は時間を対象的に体験するのではなく、自我が作動していること自体が流れること、すなわち「生き生きした現在」という時間性なのである。この「流れること」がすべての体験の根源となる（この先験性の探求は哲学の問題となる。本稿は体験以前には遡らないため、「流れ」を原点とする）。

「流れ」は原印象-把持連鎖（原印象・把持の体験内容の連続性）に由来する。原印象-把持連鎖の連続（把持系列）が流れの「流れ」と表現しうる線形性を与える。この線形性が行動する（将来に向かって自己を投企する）動物にとって予持への外挿を可能にする。すなわちある原印象-把持連鎖が次の予持の根拠となる。したがって予持-原印象連鎖（予持-原印象の連続性）も線形化される。「流れ」とは、線形という変化様態を一定に保ったまま（変化率が一定）の変化である。そして予持が予持しているのは、原印象-把持連鎖からの流れであるから、「流れ」は単に予持から把持への表の（体験される）流れだけではなく、把持から予持への方の裏の（体験させる）流れを伴った「対流」を呈している。

これを図2に描いてみた。図の左右方向は未来から過去への時間の流れを意味する。その流れを流れとして直接に体験しているのが現在という体験場である。そこでは最も直接的な原印象が瞬間的・原点的な現在として流れの折り返し点となっている。そして原印象から把持で構成された印象が予持を可能にする。すなわち流れには、予持→把持という表側の世界経験的な流れと、それを可能にする把持→予持の裏側の予持構成的な流れが二重になっている。図の上下

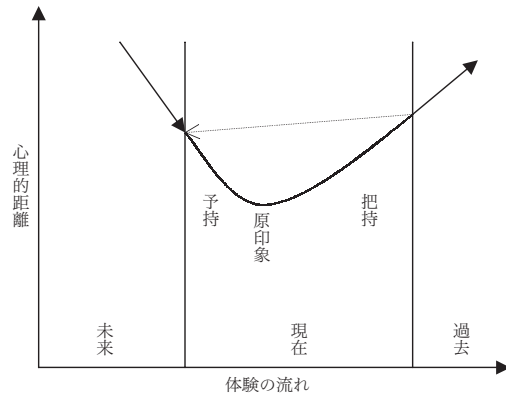


図2 現象学的現在の構造

方向は体験距離の遠近（心的空間の次元）を意味する（この次元については後述する）。原印象がもっとも印象（体験）強度が強い。今の体験の印象が構成されるのは原印象から把持の流れにおいてである。印象形成に敏感（時を味わう状態）になれば、把持は客観的時間としては延びる可能性がある。一方、予持は原印象に到来する場であり、印象として体験されることがないため、把持よりも客観的時間としては短いと思われる。

心理学的に言い換えると、木から木へと飛び移る猿や鳥の視覚情報処理の説明にも使わ

れるアフォーダンス理論における、包囲光配列の線形変化が予持の根拠となろう。たとえば、野球の外野手が打球を追う場合や犬がフリスビーを追う場合も、彼らは飛んでくる物体の運動方程式を計算して落下点を「予想」するのではなく、飛行の軌跡とその逐次的変化すなわち包囲光配列の変化率の線形的予持の連続という視覚情報処理によってキャッチを試みる。すなわち、スポーツなどの瞬間的対応においては、予想という準現前化に頼るのではなく、原印象-把持連鎖からの逐次的な外挿による視覚的な予持（現前）に対応している。これで対応できるのは、世界の変化が基本的には線形的であるためである。だからこそ、鋭く落ちるフォークボールに打者が空振りするのも、予持が把持の線形的外挿であることの証拠となる。このように知覚的現在内の予持は行動する動物として必要な能力である。

このようなフッサールによる把持の裏返しとしての予持は、驚いていない通常の時間性の説明にはなる。しかし流れがいつもこのような安定した対流、たとえば古典音楽のメロディのような安定した秩序によって予持可能であるなら、われわれは驚く機会を得られない。山形（1993）は、ヘルトの論を引用しながら、フッサールが予持で見落としているのは、恒常的な遂行現在の到来性についての根源的意識形態ではない未来意識であり、その未来意識は、まさに不意打ちする未来、思いがけなさこそがその本質であるとしている。この指摘に驚きの可能性が暗示されている。

3.2 驚きの3例

以上の時間性をもとに驚き体験を考察していくのであるが、ここで互いに勝手な驚き体験をイメージして議論しないために、準拠すべき驚き体験のサンプル（具体的様態）を呈示したい。そのためには、驚きの典型例だけでなく、非典型例も考慮に入れる必要がある。誰でもが想定しやすい典型例だけでは、驚きの「典型」を「本質」と同一視してしまう危険がある。驚きの本質は非典型の驚きにおいても含まれていなくてはならない。非典型例こそ大切なのである。ここでは典型例を1つ、非典型例を2つ挙げる。

例1. ワッという声で驚く：その場で驚き体験を与えたとしたらまずこれを実行するであろう。その意味でこれは典型例といえる。また刺激の感覚相が聴覚的である点も最も多い驚きのパターンといえる。また「ワッ」という音には言語として意味がない。すなわちこの場合の驚きは意味反応ではない点も典型である。ではなぜワ音なのか。ワと発声する時の口内は空気の蓄積から一気に開放することによって、非線形的な音の増大を示す（ちなみにこの突発的な音の増大を意図するならワ音よりもパ音の方が適当と思われる。閉口によって空気の蓄積量が増え、強勢的破裂音が大きいからである）。このような音の突発的増大による驚き刺激は、音楽作品としても残っている。ハイドンの交響曲94番（通称「驚愕」）である。この曲はハイドンが実際に聴衆を驚かせよう



図3 ハイドン交響曲94番第二楽章

として作ったとされ、第二楽章でピアノッシモのメロディの繰り返しが終わる休符の後、突然のフォルティッシモの大音響となる（図3）。

ただここで疑問が生じる。たとえばハイドンの「驚愕」交響曲中の同じ大音響を聴衆よりもさらに間近で体験する指揮者や演奏家は驚かないのだろうか（もし驚いたら演奏が乱れてしまう）。「ワッ」と驚かせる当事者も驚く者と同じ聴覚刺激を体験をしているはずである。突発的な刺激の増大という同じ体験における驚かせる側と驚く側の反応の違いは、驚かせる側が単に大音響を予期できているためであろうか。

例2. 目薬を点眼した瞬間：これは筆者を含めた一部の人にしか該当しないと思われるが、驚きは予期していながらも生じることの証拠の例である。目薬を眼球（特に角膜上）に点眼するのが苦手な者は、点眼したその瞬間、その触覚刺激によってビクッと体が驚愕反応をして動いてしまい、さらに不要なまばたきもして点眼が失敗するのである。特に眼科などで他者に点眼された時にこの反応をしてしまうと気恥ずかしくなる。この時は、当然、点眼を予期し、しっかり待ちかまえている。さらに驚くまいという意志さえある。それでも驚くのである。といっても感情的には驚き（びっくりしたという感想）は少ない。しかし身体的にはどうしても驚愕反応してしまう。この感情と身体反応との分離例の存在も考察すべき問題ある。

例3. 黒い影をゴキブリと見間違える：室内にいて、丸く黒い影（シミや物体）をゴキブリを見間違えて、ハッとする時がある。もちろん視覚刺激である。この場合は例2とは逆に、感情的には確かに驚いているが、身体的驚愕反応はほとんどない。一瞬視線が固定されるくらいである。これが非典型であるのは、まず突然の出現ではないという点。黒い影には前々から気づいていて、その後ふと見誤るのである。したがって知覚的な突発性はない。つぎに意味反応であるという点。すなわち黒い物体そのものに驚くのではなく、それがゴキブリという強い嫌悪対象である意味をもつ限りににおいて驚くのである。つまりこの例は出現の突発性もなく、意味反応である点など例1のような典型的な驚きとはかなり異なる。さらに同じ刺激における誤認が繰り返し起きる場合もある。

同様な意味誤認による驚きに、熱いと思っていたヤカンなどに触れてしまった場合もある。本来ならやけどする熱さという驚くべき触覚反応をすべきものと誤認して熱くもないのに驚いてしまうのである。これは熱いものとして意識に保持されていた結果が作用してしまった場合である。嫌悪を含んだ広義の危険性の認識がこのような意味反応を引き起こすと思われる。以上3例をまとめると表1のようになる。これを元に議論をすすめていく。

表1 驚きの3例

例	体験感覚相	刺激	予期	突発性	驚愕反応	驚き感情
1 ワッ音	聴覚	情報強度	なし	あり	あり	あり
2 目薬点眼	触覚	情報強度	あり	あり	あり	ほとんどなし
3 黒い影	視覚	意味	なし	なし	ほとんどなし	あり

3.3 驚かせるものの現出

驚かせるものは驚かせるものとしていかに現れるのか。まずは上の典型例1より、突発というその現れ方に驚くように、現れ方が驚きそのものを左右する。現出（現れること）

のとらえにくさは、予持・把持系列のスムーズな流れに常に流されているためである。つまりわれわれの平時の現れはとらえにくい。予持とは原印象-把持連鎖からの外挿であるなら、予持において現出するとは、把持から期待されている現出が現出し続けていることにほかならない。

a. 突 発 性

驚きは点眼例に示したように予期しても生じる。より細かく言えば予期された突発性に對して驚く。つまり問題は予期や予想ではなく、突発の方にある。ならば突発性とはいかなる現象なのか。突発とは、現在の体験内の事象である。それは、予持と異なった原印象であること。原印象の予持に対する裏切りである。すなわち線形性という流れが断ち切られ、時間的生が一瞬に破壊された体験である。それに対し予想はあくまでも流れの中での予想であり、流れの断ち切れという体験はそもそも予想できない。だからわれわれは、怒りや悲しみのように予想によって前もってその感情を体験することは、驚きにおいてはできない。過去の驚きを想起しても、未来の驚きを予期しても、今驚くことはできない。驚きは時間の流れの中にはなく、その不在にあるからだ。

点眼で驚いたのは、正しく予期していても予持していなかったのである。なぜか。予持は未来が実現する過程ではなく、把持からの外挿だからである。突発とは未来からの突発ではなく、流れていく今（把持系列）からみた突発だからである。例3ではすでに把持されていた黒い影がそのまま予持されたのだが、後続する原印象ではその影ではなくゴキブリが現れてしまったのだ。そのような突発性が、流れという世界との安定した関係を破壊したとき、われわれは驚くのである。日常のレトリックでも驚いた場合「時間が止まった」と表現されるように。

しかし突発性には2種類ある。突然音が鳴り出す場合と突然音が鳴り止む場合、突然地震が起きる場合と突然地震が止む場合、すなわち突発的出現と突発的消滅である。そして、出現を正の突発性、消滅を負の突発性とするれば、正の突発性の方が驚きをもたらしやすい。なぜなのか。突発的消滅は把持系列においては、今まで鳴っていた音という現出が残存しているが、突発的出現は現出そのものの突発性であることが異なる。この感覚的な違いは、消滅は消滅したものが何であるかは既知であるが、突発的出現は出現したものが未確認であるという認知的な違いをもたらす。予持系列の体験でいえば、待ち受けていなかったものの到来と待ち受けていたものの非到来の違いである。また世界側から受ける流れを破壊する力となりうる「力」（エネルギー）の有無もある。それが無ければ、単なる差異（非線形性）としての突発性では驚かない。

ただし、突発性（非線形的な現れ）は実は頻繁に出現する。視覚的出現に比べて音の鳴り出し（波形的には「立ち上がり」）はたいてい非線形的である。だからこそ音で驚かせることが容易なのであるが、しかしわれわれはあらゆる音が鳴り出すたびに律義に驚いているわけではない。逆に言えば、日常の身の回りの音になぜ毎回驚かずにすんでいるのか。これが新たな疑問となる。

b. 驚きの閾値

流れるようなメロディも、実は音程の周波数的変化としては離散（非線形）的な移動で

ある。逆にいえば物理学的には非線形的であっても、われわれはそれを線形（連続）的なものとみなしてしまう（いわば驚くまいとする）傾向がある。離散的に上向するメロディを単調な上昇線とイメージ化できるわれわれには、非線形的凹凸を均して線形化する傾向があるとさえいえる。弱い非線形的変動は線形の基本流を破壊できずに、むしろ吸収されるとすれば、流れという時間体験には線形性への復元力、「粘性」のようなものが想定できる。いいかえれば、流れの線形性を破るには相当な「力」（エネルギー）、それも力の集中が必要である。同じ力でも線形的増大では驚きを与えないから。

驚かす、すなわち時間の線形性を破る（流れを破壊する）には、「刺激の急激な増大」すなわち、単なる突発性だけではなく、強い差異、しかも不在から出現へという方向の差異性が必要である。いくら予想・予期されていても驚いてしまうのは、その衝撃が強いからである。

そこで問わねばならないのは、驚くにはどの程度の強さが必要かという存在者レベルの問題ではなく（個人差や状況差があるに決まっている）、突発することに加わる突発するものの強さが驚き体験に与える意味である（それが個人差・状況差を説明できる）。

驚きの時間性は現出の突発性しか説明できない。しかしそれは驚きを可能にする条件でしかないことがわかった。われわれは特定の突発にしか驚かないのである。突発に加わるべきその特定の条件は何か。それには現出の非線形性とは別の属性、現出強度にかかわる側面をみななければならない。

3.4 驚きの空間性

現出の強度とは、刺激の物理的エネルギー量や感覚強度そのものではなく、体験強度の強さである。それはもちろん聴覚が受ける音の大きさに比例はするが、必ずしもそれだけでなく、たとえば服にしまった携帯電話の突然のバイブ（感覚強度は小さい）に驚いてしまうように、突然の「異様な近さ（生々しさ）」の体験でもある。すなわち空間性（心理的距離）の体験である。

驚きの空間性は、前述したように驚きの全体性にかかわっている。すなわち、心的空間においてその空間全体を占めてしまうのが驚きの全体性である。しかし、現出強度を問題にするなら、広さとしての空間ではなく、近さとしての空間性、すなわち（心理的）距離の次元を考えなくてはならない。

驚きの突発性を距離体験として表現すると、安全な「間」が破壊され、不意に侵入された時の動揺（パニック）といえる。驚きの衝撃（突発的出現）とは異様な心理的距離の近さでの現出という「近すぎる」体験である。すなわち驚かせるものが破壊する時間的な間は、安永（1999）がモデル化した体験距離（ファントム距離）上では空間的な間すなわち余裕の破壊を意味する（図4）。安永モデルでは距離0とは最大の体験強度であり、対象と物理的に衝突して、巻き込まれて

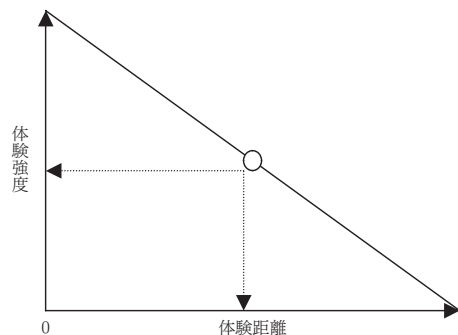


図4 安永モデルの概略（山根作図）

いる状態であり、それは瀕死を意味する。

「不意打ち」という表現は、時間的突発性（＝不意）だけでなく、体験空間的な異常接近（＝打ち）をも含意している。驚きは無防備な遭遇（異常接近）であり、無防備さ（生々しい＝生き生きした）の露呈でもある。それは安永的に言って、生命の危機を意味する。ここにおいて驚き体験とは存在の危機であることがわかる。逃げることを動機づける恐怖は存在を危険にする対象（存在者）への評価感情であるが、驚きは逃げる余裕さえない（差し迫った）事態そのものであることの開示である。驚いている時、そこに開かれる事態は、存在が危機となりうることである（なっているかはまだ不明）。驚きの全体性、すなわち驚いている時に驚いている以外の感情を並列できないのも、驚きこそが自己の存在にかかわっているからである。したがって時間的突発性や客観的な刺激強度の体験は同じでも、驚かせる側が驚かなくてすむのは、まずこの体験強度（余裕）が異なっている点がかかわっているであろう。

3.5 意味的反応としての驚き

だがまだ問題が残っている。刺激の強い突発性によらない驚きである。例3のゴキブリに見えた黒い影や熱くないヤカンが刺激としての突発性は無かった（たとえばヤカンはまったく熱くない）。これらの体験は、刺激そのものの物理的・感覚的衝撃ではなく、意味づけられたための驚きであった。たとえば突然ゴキブリに気づくのであるから、黒い影としては既知であるが、ゴキブリという意味の現出は突発している。であるから、おそらくは逆にゴキブリを黒いシミと誤認した時は驚かないであろう。

意味反応としての驚きにおいてこそ、驚くことの生における意味（生物学的機能）が明らかになる。誤認による驚きにおいては、熱いヤカンに触れてしまった時の「熱い！」という感覚強度からくる驚きと、熱いと思っていただけのヤカンに触れて「熱いものに触ってしまった！」という驚きとの違いが問題となる。本来ならそれは同一の現象なのであるが、誤認反応によってこれらが分離されうるものであることが暴露された。つまり前者は刺激の実際の衝撃力によるが、後者は危険という意味方向への差異性（要警戒対象の現出）への反応である。快走中のドライバーが、パトカーや白バイ（に見間違える車）に対してだけハッとするのも、同様な意味反応である。

4. 驚くことの意味

一定レベル以上の動物や人間でも乳児段階で驚愕反応を示すことができる。また成熟しきった人間でも驚愕反応そのものは消失しない。驚きは動物にとって根源的で、進化・成熟しない、する必要のない感情であるらしい。驚愕反応を驚き感情の表現とみなせば、驚き体験が開示するのは、流れる時間の切断が可能であることであつた。「流れること＝生」とするなら、驚きは、流れることの切断＝死が可能であることを開示している。死とは流れないこと＝（永遠の）立ちとどまりであるなら、驚きは一瞬の死を意味する。すなわち、驚きは、一瞬の間、流れることが暴力的に断ち切られ、立ちとどまることのみになった自我の生き生きした瞬間死である。冷たいヤカンのように、驚かせるものはわれわれに必ずしも身体的な損害を与えるものではない。しかし時間は断ち切られてしまう。こ

の断ち切りこそが驚きがもたらす本質的な「損害」である。

そうであればこそ、驚きという反応が地球上の動物に延々と引き継がれていることの意味が、また新生児にすでに生じることの意味もわかってくる。われわれは知性によって自分が死すべき運命にあることを知るずっと以前に、また概念としての死を持ちえない生き物においても、死の到来が可能であることが驚きによって開示されるのである。

そしてここに至って驚愕反応が擬死反射を伴う行動生物学的意味が導かれる。驚愕反応では擬死反射どころか実際に死することもある。すなわち最強の驚愕反応は死そのものである。擬死反射をしている当の動物も、死んだように失神しているのであり、死んだ演技をして薄目を開けて様子をうかがっているのではない。擬死反射は偽装や転移行動すなわち偽死ではなく、あくまで擬死（類死）である。そして擬死反射をした個体が、無理な逃走を図った個体よりも結果的に生存できたために、その反応が受け継がれてきたにすぎないのではないか（ついでにいえば、もう一つの類死体験は睡眠である。驚きは突然死で睡眠は衰弱死の類死体験といえる）。驚きは、「流れる時間の死」を生き生きした瞬間において体験することであり、生そのものに全体的にかかわった唯一の感情である。驚きが原始的な感情であるだけにそれは動物であることの本質にかかわっている。

以上、驚き体験について、提出した疑問にすべて納得いく回答を出せたわけではなく、また疑問をすべて提出したわけでもないが、既存の心理学的認識よりはいくぶんか深めることができたのではないだろうか。

最後に、これまで感情（情態性）と時間とを現象学的に扱ってきた性質上、『存在と時間』の著者である M. ハイデッガーを無視して終わるわけにはいかない。そこで無謀ながらもハイデッガー的な表現を借りて驚きの意味づけをして筆を擱くことにする。

驚きは、本来的な「死へ臨む存在」であることの露呈であり、死の到来時期の無規定性（＝死の突発性）の模擬体験である。すなわち死を他人事・未来の事として忘却している日常性から、存在（在ること）の本来性（在ることの有限性＝無への可能性）へ引き戻される体験である。驚きは、おのれを死へ接近させたというだけ、日常性の中に頹落している現存在にとっては不快となる。

文 献

- R. Descartes, *Passions de l'Ame*, 1649 (R. デカルト「省察・情念論」野田又夫訳 中央公論社 2002)
- P. Ekman & W. V. Friesen, *Unmasking the Face*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1975 (P. エクマン & W. V. フリーセン「表情分析入門——表情に隠された意味をさぐる」工藤力訳編 誠信書房 1987)
- K. Held, "Lebendige Gegenwart." Martinus Nijhoff, 1966 (K. ヘルト「生き生きした現在——時間と自己の現象学」新田義弘・小川侃・谷徹・斎藤慶典訳 1997 北斗出版)
- E. Husserl, *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins*. In Band IX, *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, 1928 (E. フッサール「内的時間意識の現象学」立松弘孝訳 みすず書房 1967)
- J. Haydon, *Symphony No. 94 G major 'The Surprise'*, Ernst Eurenburg, London
- C. E. Izard, *The Psychology of Emotions*. Plenum Press, New York, 1991 (C. E. イザード「感情心理

山 根 一 郎

- 学」莊嚴舜哉監訳 ナカニシヤ出版 1996)
- 斎藤慶典「思考の臨界——超越論的現象学の徹底——」勁草書房 2000
- 山形頼洋「感情の自然——内面性と外在性についての感情の現象学——」法政大学出版会 1993
- 山根一郎「ロボットは他者になれるか——テクノロジーの存在論的研究へ向けて——」『椋山女
学園大学文化情報学部紀要』3, 29-52 2004
- 安永浩「精神の幾何学」岩波書店 1999